KAAT
KANAGAWA ARTS THEATRE

レポート 連続講座『ふたつの隅田川』

【第３回】川と芸能～“隅田川もの”の系譜と「清元 隅田川」

関連講座「ふたつの隅田川」の第３回（２月 24 日）は、能「隅田川」を元に生まれた「隅田川もの」をテーマに行われました。KAAT での「清元 隅田川」と国立劇場での「隅田川花御所染」という“ふたつの「隅田川もの」”が上演される ３ 月を前に、古典芸能研究家の鈴木英一氏、国立劇場・歌舞伎プロデューサーの大木晃弘氏によって、それぞれの見どころが語られました。

「清元　隅田川」

明治 16 年、開曲（二世清元梅吉作曲）。明治 39 年、歌舞伎座にて藤間政弥の名披露目に振りが付けられ、歌舞伎では大正８年、二世猿之助様行帰り第一回作品として上演。

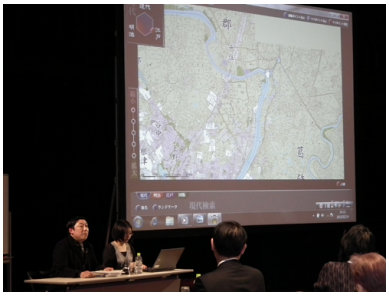
＜あらすじ＞

人買いに我が子を浚われた都の女が、物狂いの様子で隅田川までさまよい現れ、渡し守に乗船を乞う。女が向こう岸に多くの人が集まっている理由を聞くと、渡し守は去年三月に人買いに見捨てられて死んだ男子を弔う念仏衆だと答える。その十二歳で死んだ男の子こそその狂女の子、都白川の吉田家の子息梅若丸であった。驚き嘆く狂女は、渡し守に塚に案内され、息子の菩提を弔う念仏を唱える。すると我が子の声がし、姿が見えた…。しかし声は川を飛び交う都鳥の鳴き声、姿とみえたのは挿し柳であった。　（当日配布された鈴木英一氏によるレジュメより

【注目ポイント！】

①「清元 隅田川」にまつわる五つの境界

その１：川は「生死」「河岸彼岸」「現世来世」の境界



川は、生活を営むために必要な水資源を供給する「人を育む存在」であると同時に、「死への意識と畏怖」を呼び起こすものであり、また「禊（みそぎ）」の場でもありました。川は「現世と来世」の境界線として捉えられていたのです。梅若が死んだ場所である塚が、隅田川の向こう岸（京都から向かって川の東岸）にあったのもそのためです。また、かつて芸能興行が河原で多く行われた理由のひとつに、芸能そのものが「現世と来世」の境にあるとみなされていたことが挙げられます。

その２：隅田川は武蔵と下総の境界

能「隅田川」が生まれた室町時代、京からみると、隅田川は辺境の地であり、隅田川を超えると「別世界」と考えられていました。同時に江戸からみると、隅田川周辺は交通の要地であり、多くの人が集まる場所でした。人買いが子どもを連れてここまで来たのは、人の集まる場所で子どもを売買しようとしたと考えられます。

その３：京と吾妻の境界

能「隅田川」が生まれた時代の意識は「狂女が吾妻の辺境まで下っていった」という「京中心」の発想であるのに対し、歌舞伎の時代意識は「狂女が京から下ってきた」という「吾妻中心」の発想になっています。また鳥の名前を聞かれた「鷗（かもめ）」と答えた渡し守に、狂女は（『伊勢物語』の歌を引いて）「都鳥」と言い返しますが、当時「鷗」と「都鳥」は同じ鳥を意味し、居住地域によって名前を使い分けられていました。

その４：狂いと藝の境界

能「隅田川」で、船に乗せてほしいと乞う狂女に、渡し守はなぜ「面白う狂うて見せ候へ」と言ったのか？――それは、「狂う」「舞う」「藝尽くし」（身につけた芸のかぎりを演じること）が能・歌舞伎の最大の見どころであったためです。

その５：近世と近代の境界

ところが「清元 隅田川」では、“狂乱もの”の中心であり、江戸時代までの“隅田川もの”の最大の見どころであった「藝尽くし」がありません。また渡し守にも狂女に対する侮蔑・異化の意識が見られず、狂女は「物狂い」ではない、と捉えられています。「清元 隅田川」は、歌舞伎の手法を取り入れつつ、テーマを能「隅田川」に原点回帰させて、近代的な心理描写を追求した作品です。言葉や文化を超えて、多くの人の心を打ち、海外公演でも人気演目になりました。

②歌舞伎の“隅田川もの”のひとつ：「隅田川花御所染」

大きな流れ：梅若伝説　⇒能「隅田川」⇒歌舞伎の隅田川もの　⇒(近代)⇒「清元 隅田川」

国立劇場で３月に上演される「隅田川花御所染」は、「東海道四谷怪談」で知られる四世鶴屋南北の作品です。南北は“ないまぜ”の作劇手法を得意とし、「隅田川花御所染」では、【隅田川もの】【清玄桜姫（せいげんさくらひめ）もの】【鏡山（かがみやま）もの】の三つの世界がないまぜにされています。今回の国立劇場の上演では、わかりやすさを重視して、鏡山物の物語はカットし、深窓のお姫様であり、宗教者である尼が、色欲に迷って堕落していく物語を中心としています。

＜国立劇場「隅田川花御所染」の特設HP＞　http://www.ntj.jac.go.jp/2013/sumidagawa.html

③歌舞伎の“隅田川もの”における「隅田川」

江戸時代、歌舞伎の観客にとって、隅田川は盛り場の中心地であり、隅田川を中心に事件が展開するのは非常になじみ深く感じられたと思われます。「隅田川花御所染」の中の「隅田川渡し船の場」は、作品を通しての見せ場です。零落した清玄尼が隅田川を渡っていると、白魚船に乗った松若丸とすれ違います（当時、隅田川は白魚が生息する澄んだ川でした）。ここでは、清玄桜姫物の有名なセリフ「破れ衣に破れ傘　それも誰ゆえ桜姫」をもじったセリフが語られ、お互いにそれと気づきつつもすれ違う二艘の船が、すれ違いの恋の象徴ともなっています。

④「狂い」と「救い」

「隅田川花御所染」は、「尼僧が恋のために破滅していく」物語であり、深窓の姫君が、まだ見ぬ恋に心を奪われて、人生が狂っていく、つまり狂女となる物語でもあります。「聖なるものが俗になる」物語、という意味で、隅田川ものの「狂い」の系譜を受け継いでいると言えます。「清元 隅田川」は、歌舞伎「隅田川花御所染」同様、物語としては「救い」なく終わりますが、幕が閉じる瞬間に照明で朝日が昇る様子が描かれ、観客に光が見えるかのごとく感じてもらえるよう、「救い」が演出されています。国立劇場での歌舞伎「隅田川花御所染」とも比較しつつ、ぜひKAATでの『隅田川二題』～オペラ「カーリュー・リヴァー」と「清元 隅田川」を、それぞれの舞台芸術の表現の違いを見比べながら楽しんでいただきたいと思います

連続講座「ふたつの隅田川」最終回は、今回の上演でオペラ「カーリュー・リヴァー」の演出・振付、および「清元 隅田川」で班女の前を舞われる花柳壽輔氏を迎え、KAAT芸術監督の宮本亜門とのトークセッションをお送りします。

【第４回】花柳壽輔 × 宮本亜門　司会：中井美穂　トークセッション　３月２日（土）

チケットかながわほかで好評発売中!!

隅田川二題～<オペラ>カーリュー・リヴァー／<日本舞踊>清元 隅田川～

2013年3月22日（金）19:00・23日（土）KAAT 神奈川芸術劇場〈ホール〉

【チケットかながわ】045-662-8866（10:00~18:00）